

2018.7.8 メッセージ エペソ人への手紙 1章

パウロはアジア各地を旅して次々と教会を設立しました。彼は3度にわたり宣教旅行を行っていますが、エペソには第二次と第三次の宣教旅行で立ち寄っており、特に第三次では2年以上も滞在して集中的に宣教を行っています。彼とエペソの教会の深いつながりは、使徒行伝20:13以降の最後の別れの記述を見るとよくわかります。彼は約3年(20:31)にわたりエペソで活動を続けました。エペソはパウロが三度の宣教旅行の中で最も多くの時間を割いた地なのです。

彼はその別れのあと、エルサレムで捕らえられてローマに護送され、そこで使徒行伝の記述は終わっています。しかし、彼は獄中であって多くの手紙を書きました。それらの書簡を「獄中書簡」と言います。エペソ書が獄中で書かれたことは、複数の箇所(3:1、4:1、6:20)から読み取ることができます。獄中書簡は4つあり、『エペソ人への手紙』『ピリピ人への手紙』『コロサイ人への手紙』『ピレモンへの手紙』です。

a.誰に何のために書かれたのか

エペソ書の写本を調べると、冒頭の「エペソにいる」という言葉が欠落している写本があります。聖書は人の手で書き写された写本が原本なので、複数の写本の間で微妙に違いがあるのです。こうした違いは、当時の他の書に比べると極小ですが、確かに違いは存在します。似たような問題は旧約聖書にもあり、一見するとスペルの間違いのように見える箇所などがあるのです。ユダヤ人たちは、そのような「問題箇所」には隠された意味があると考えました。新約聖書の写本間で微妙な違いがある箇所は非常に少ないのですが、それらの箇所にも、特別な意味が隠されているのではないかと私は考えます。たとえばローマ書8:2は「いのちの御霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放した」となっていますが、「わたしを解放した」という写本もあるのです。もちろん、パウロだけでなく私たちが解放されたので、そのどちらの写本も意味的には適切です。でも、ここに2種類の写本が残されていて、どちらが正しいとも決められないということは、読者がそこに自分の名前を入れて読んでもよい、という意味なのではないかと私は思っています。

というわけで、「エペソにいる」という言葉が欠けた写本の存在は、私たちはこの手紙をエペソの教会だけでなく、多くの教会に対するメッセージとして読むことを勧めているようです。新約聖書に収録された手紙は、その多くがクリスチャンに対する一般的メッセージを含んでいますが、エペソ書は特にそうなのです。

前述のように、エペソとパウロは深い縁がありましたが、この書簡の中には不思議なことにエペソ特有の問題に関する言及がほとんどありません。様々な個別的問題が話題に登場するコリント人への手紙と読み比べてみると、その違いは歴然です。また、エペソの教会には

多くのユダヤ人信徒がいたのに、この書簡は主に異邦人信徒に向けて書かれているように思われます。ですから、圧倒的に異邦人信徒が多い、現在の大半の教会に必要なメッセージがこの書に書かれています。「教会における異邦人とユダヤ人の関係」と、それに続く教会内の一致は、この書の重要な主題です。

b. エペソ書全体のあらすじ

では、エペソ書の論旨を概観してみましょう。パウロはまず、罪の赦しに言及したあと、キリストを通じた宇宙完成という、スケールの大きな主題から話を始めます。そして2～3章ではユダヤ人と異邦人の関係が語られます。異邦人は、あくまで神の恵みによりユダヤ人に加えられた者なのだと、パウロは強調します。ここで説かれる「ひとりの新しい人」は、私たちが始めることになった「アジア・メシアニック・フォーラム」のテーマでもあり、イスラエルを愛する人々の「合言葉」のようになっています。

それから4章に入ると、パウロは教会のあるべき姿、リーダーたちの役割について語りはじめます。ここで展開される教会論は、ここ数十年間、にわかに注目を集めるようになりしました。ここでパウロが数えている5つの役職、つまり使徒、預言者、伝道者、牧師、教師という役職は、現代の「新使徒運動」に関連しており、とてもホットな話題です。とにかく、教会の指導者は、適切に聖徒たちを整え、宇宙完成に向けて教会が機能を発揮するようにと、パウロは勧めるのです。

次にパウロは、教会内での人間関係や、家族関係に話を進めます。教会がキリストの花嫁であることが明かされ、この世での主従関係などの心得が語られ、最後は霊的戦いの武具が言及されます。

この書は、宇宙的な福音のスケールから始まって、その目的に向かって私たちが何をすべきなのかが、実用的、具体的に記述されているのです。私たちは、自分の人生における問題解決という必要性から福音を理解しがちですが、エペソ書は逆に、宇宙的な問題解決からスタートして、最後に私たちの生活へと落とし込んで行きます。

c. 「選び」と「罪の赦し」

では、1章に取り組んでみましょう。まず「わたしたち」が天地の造られる前から選ばれ、恵みのゆえに罪があがなわれたことが語られます。この部分は、つつい私たちクリスチャンのことだと思って読みがちですが、13節を読むと、1～12節の「わたしたち」はユダヤ人を意味していることがわかります。

3～7節で語られるように、選びと罪の赦しには密接な関係があります。たとえば、イザヤ書43：25には、神が自分自身のために選びの民の罪を消すと書かれており、44：22にもその主題が繰り返されます。神自身が選んだ民が、罪にまみれた状態であり続けるなら、神がその人々を選んだのが「失敗だった」ということになってしまいます。神は「永遠の契約」のゆえに、その民を捨てて他の民を選びなおすことができません。ですから、神の選択肢は選びの民の罪を消すことしかありません。罪の赦しは、第一に神のあわれみと愛のゆえですが、それは神のご計画上の必要性から、まずは選民であるユダヤ人だけに与えられるものなのです。

これは、祭司が最初に自分の家のために贖いをするのに似ています。祭司が汚れていたのでは、民のための贖いできません。ですから、たとえばレビ記16章の大贖罪日の贖いの指示を見ると、祭司は先に自分と自分の家族のために贖いをするように命じられています。諸国民のために祭司の国民（出エジプト19：6）となるのが選民の使命なのですから、神が先に彼らの罪を贖ったのは理にかなったことでした。

この視点は、ローマ書とは大きく異なります。ローマ書は、罪のために「みじめな状態」だった私たちが神が救済して下さるといふ、罪人側から見た物語が語られ、8章になってやっと宇宙的な救済（8：19以下）に話が進められますが、エペソ書においては、「天にあるもの地にあるもの」（10節）という、宇宙的な計画が最初に語られたあと、私たちの日常生活における罪の克服に話が進められます。

エペソ書1：8を見て下さい。パウロは、罪の赦しという恵みを、神がさらに「増し加えるのだ」と言います。そして彼は、さらに「奥義」を語り始めるのです。その奥義は、最初から示されているのではなく、神がご計画に従ってそれを示して下さるのです。奥義が段階的に啓示される、というのはエペソ書の中で繰り返される重要な主題で、**Progressive Revelation**（漸進的啓示）とも言います。旧約時代にはユダヤ人にさえも知らされていなかった奥義が、今の時代には千以上の言語に翻訳されて全世界に配布されています。そして、現在生きている私たちが、まだ知らない奥義もあるのです。

d. 異邦人と神の計画

さて、13節になると、突然「あなたがた」が登場して、今までユダヤ人のことが論じられていたことが明らかになることは、すでに述べました。これは、エペソ書の少し不親切なところで、そう指摘されるまで、なかなか気づきません。もしかすると聖霊は、このことを一部の人々に秘しておきたかったのかもしれませんが。

実際、ユダヤ人信徒が教会の中に回復するまで、エペソ書の意味の一部は、隠されていまし

た。しかし、20世紀に入り、メシアニック・ジューの出現によって、今、その隠された意味が少しずつ明らかになっています。私たちは不思議な時代に生きているのです。

そして、異邦人がユダヤ人に加えられたことの保証として「聖霊の証印」が与えられたと、パウロは言います。これは過去形で書かれていますので、それは読者（クリスチャン）全員がすでに受け取っているものです。ところが17節を読むと「知恵と啓示との霊」を神が与えられるようにと、パウロは神に願っています。つまり、洗礼を受け、聖霊の証印を受けてはいても、それではまだ十分ではないのです。確かに、罪の赦しにはあずかっているのですが、まだ神の国のスケールが理解できているわけではありません。それを知るには、どうしても神から「知恵と啓示との霊」をいただかなければならないのです。

パウロが「絶大なもの」（19節）だというキリストの力は、どれほどのものなのでしょう。パウロは1章の終わりに向かって、宇宙的なキリストのミッションを語っています。その中核は、キリストのからだである教会なのです。私たち異邦人が罪の赦しを受け、救われるのは、とても素晴らしいことです。でも、福音はそれで完結するわけではありません。宇宙全体の完成という、驚くべき神のご計画があり、そのために私たちは召されたのです。

これから6回かけてこの書を学んでいきますが、まずは私たちの目標、信仰の目的が宇宙レベルの神のご計画にあるということ、しっかり頭に入れつつ、学びを進めて行きましょう。

2018.7.22 メッセージ エペソ人への手紙 2章

前回は学んだように、この手紙は主に異邦人信徒に向けて書かれています。そしてユダヤ人信徒が「わたしたち」、異邦人信徒が「あなたがた」とされています。今日学ぶ2章は、特に異邦人とユダヤ人の関係を詳しく論じている箇所です。

a. 2章の主題1：ユダヤ人も異邦人も死んでいた

2章に入ってパウロは、ユダヤ人も異邦人も死んでいたと宣言します。ここは、1章とは逆に、異邦人から始めて、次に「わたしたちもみな」（2：3）とパウロは論を進めます。人類はみな神の基準に到達せず、怒りの対象だったのですが、神は一方的な恵みによって私たちを生かしてくださったのです。

しかし、話はそれで終わりではなく、「キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さった」という話が語られ、それは「神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すため」だということが明かされます。この、スケールの大きなメッセージを、私たちは受け止めなければなりません。

「何とか神の怒りから逃れる」という話から、急転直下というか、その反対で急転上昇とも言うべき展開で、罪の赦しは「最終目的」ではなく「手段」であったことがわかります。

b. 神の作品である私たち

そして、9～10節で「行い」が出てきます。この箇所は、「わかっているもの」として、簡単に「おさらい」をするような書き方がされているので、注意して読む必要があります。まず、9節では私たちが行いによっては義とされない、という原則が確認されます。人間は罪の奴隷になっているので、正しく生きられず「怒りの子」なのです。だから、恵みによって義とされたのでした。

ところがパウロは「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである」（2：10）と言います。

生まれながらに怒りの子である私たちが、どうしてよい行いなどできるのでしょうか。ここで「神の作品」という言葉を、創世の時に神によって「神のかたち」に創造されたことだと解釈してはいけません。そうではなく、パウロはキリストの恵みを受け入れて、洗礼を受けた時に「新たに造られた」ことを言っているのです。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた」（2コリント5：17）と書かれているとおりです。生まれながらの人間は、神を喜ばせることができず、新たにキリス

トにあつて造られた人だけが神を喜ばせられるのです。

c.記憶しておきなさい

さて、11節から、いよいよエペソ書2章の真骨頂である部分に入ります。11～12節を読んでみましょう。

「11 だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であつて、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、12 またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であつた。」

ここは、異邦人のことをあまりにも悪く言っているのです、もしこの発言を現在のメシアニック・ジューがしたら、あまりにも高慢のように聞こえて、非難が殺到するでしょう。だから、パウロがこれを書き残してくれたことは、とても感謝すべきです。しかも、幸いなことに、ほとんどの聖書翻訳ではこのくだりを薄めずに正確に翻訳しています。キリストを知らず、契約に縁が無い状態は、本当に「みじめで希望が無い」のです。

「記憶しておきなさい」というのは、注意しないと忘れがちだということです。長年、クリスチャンをやっていると、クリスチャンとされたことを感謝する気持ちが薄れ、それが当たり前になってしまいます。そして、いつしか他の人々、つまり仏教徒も無神論者も、同じ状態にされているかのように勘違いしてしまうのです。すでに救われた人は、他にまだ救われていない人がいることを、決して忘れてはなりません。

これは、他の人々を「見下す」のではありません。先に救いを受けた人は、他の人々にそれを語り伝える責任を与えられるのです。

d.近い者とされた

次にパウロは、隔ての中垣がキリストによって打ち砕かれ、ユダヤ人と異邦人が「ひとりの新しい人」にされたと語ります。これは、ともすると「ユダヤ人と異邦人の間に区別がなくなった」と誤解しがちです。しかし、ここで「近いものになった」のであつて「同じものになった」のでないことに注意が必要です。

現に、パウロは救われて同じ国籍の者となつた人々に向かって「あなたがた」と「わたしたち」の違いを前提に話を進めています。さらに「違っていた時代のことは忘れよう」ではなく「記憶しておきなさい」と言っているのです。

聖書における「ひとつ」は、多くの場合、複合的一体性を指します。たとえばイエスは「父と私とは一つである」(ヨハネ10:30)と言いながら、その後で「父がわたしより大きい方である」(同14:28)と言っています。父とイエスは別の存在であり、明らかに「区

別」はありましたが、それでも「一つ」でした。これは、三位一体という深遠なキリスト教の教理にあるとおりです。パウロはエペソ書で「ひとつ」「一人」「一体」を計15回ほど使っているのですが、これらはすべて「区別が無い」のではなく、違いを持ったままで調和・一致するという意味です。

これは、後で出て来る「キリストと教会」の関係においても同じです。私たちはキリストの体とされたので、キリストと「一つ」ではありますが、キリストではありません。

e. 数々の規定から成っている戒めの律法（2：15）

これは、メシアニック運動に対する反対論としてよく引用される箇所「律法が廃止された」という論拠に使われます。しかし、パウロが律法廃止論者でなかったことは、彼の数々の行動から確かであり、ここでユダヤ人信徒と異邦人信徒が違いを持ったまま「一つ」になることを論じている、という文脈を見れば、この聖句の意味は明らかでしょう。（この点は、多くの専門書に詳しいので、ここでは省略します。）

問題は「隔ての中垣」なのです。律法の中には、確かにユダヤ人と異邦人を区別するための規定が数多くありました。食物に関する複雑な規定もその一つでした。昔も今も、共に食事をするというのは、特に中東においては重要な事であり、しばしば重要な契約は食事を伴っていました。ところが、神はユダヤ人と異邦人とを区別（聖別）するというご計画のために、両者が不用意に交わらないように注意されたのでした。

そこで、ユダヤ人たちは異邦人とあまり交わらないように、様々な規定を設けました。それはペテロが使徒10：28で述べている通りです。彼はユダヤ人であったので、異邦人の家には入れなかったのです。しかし神は、それを廃止されたのだと、パウロはそこで宣言しています。しかし、これは決して「律法全体」が廃止されたというのではないのです。

f. 聖徒たちと同じ国籍の者

同じように考えると、「聖徒たちと同じ国籍の者」（2：19）という意味も見えてきます。私たち異邦人は、ユダヤ人と同じくイスラエルの国籍を与えられたわけではありません。しかし、私たちの国籍は天（ピリピ3：20）にあるのです。

ここで、少し「国籍」（ギリシャ語ではポリテア）について考えてみましょう。この2：19の「国籍」の英訳は「シティズン」なのですが、2：12「イスラエルの国籍が無く」の英訳は、多くの翻訳で、イスラエルの「コモンウェルス」から排除されていた、となっています。これは、とても重要な単語です。この単語がもう一回だけ聖書に登場しますが、それは使徒22：28、パウロがローマの「市民」だという箇所です。彼はローマに生まれたわけではありませんでしたが、たぶん両親の社会的地位によって、ローマ市民権を与えられていたのです。それによって、彼はローマ兵士の保護を受ける権利があったし、ローマ皇帝に

上訴できたのです。

私たちも同じように、イスラエルに生まれたわけではありませんが、イスラエルの「コモンウェルス」に加えられたのです。それは、連邦とも訳される概念です。英国の旧植民地が、現在もなお「英連邦」という形で英国女王を間接的にいただいているのと同じです。

g. 神の教会である建物

2章の最後は、建物のたとえです。20節の「あなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」は、黙示録21:14の、新しいエルサレムの礎石を思われる表現です。隅のかしら石は、石造建築の用語で、四角い建物の四隅の一番下に置かれる石のことです。全ての石の重みがここにかかってくるので、もしこの石が割れると建物全体が崩壊してしまいます。ですから、石工たちは注意深く石を吟味して、最も強そうな石を選ぶのです。

旧新約聖書には「家造りらの捨てた石が、隅のかしら石になった」(マタイ21:42ほか)という言葉が何度か登場します。キリストの型であるダビデも、そうでした。実の父が「まさか」と思い、かの大預言者サムエルでさえも、他の兄弟を選ぼうとしたのですが、神の選びはダビデでした。

h. 「かしら」と「隅のかしら石」

さて、1章の最後には、キリストがすべてのものの「上」にあると書かれています。キリストは教会の主人であり「かしら」なのです。ところが、2章の最後の「隅のかしら石」は、建物のいちばん下にある石です。いったいキリストは私たちの「上」なのか、「下」なのか、どちらなのでしょう。

イエスは弟子たちが、誰が偉大なのかを議論していた時「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない」(マタイ20:27)と言われました。まさに、キリストは私たちの頭でありながら、最も負担のかかる隅のかしら石となって、私たち教会を支えておられるのです。

私たちもまた、自分たちが教会を建て上げる「石」だということを忘れてはなりません。石造建築においては、石は必ず下から上へと積み重ねて行きます。私たちの上にもまた石が積み重ねられて行くのです。キリスト、使徒、預言者という土台、そして営々と教会の石を積み上げて来た人々に感謝すると共に、私たちもまた、これから積まれる石を支え、仕える気持ちを持つようではありませんか。

2018.8.12 メッセージ エペソ人への手紙 3章

3章冒頭は「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ」です。パウロは、自分が投獄されているのは「あなたがた異邦人」のためだと言うのです。これは単なるレトリックではありません。

a. 異邦人のために囚人となったパウロ

使徒行伝の20章以下の記述をもとに、簡単にパウロの投獄の経緯を追ってみましょう。彼は過越の祭の後で七人の異邦人信徒を連れてピリピを出航(20:6)します。彼は49日後のペンテコステの祭(20:16)にはエルサレムに着こうとして、大急ぎで旅をします。それは、初穂の祭であるペンテコステに、異邦人の「初穂」である人々七人(神の完全を意味する数)を神殿に連れて行こうとしたからでした。

しかし、彼が神殿に行くと「パウロがモーセの律法に反することを教えている」と非難する人々がパウロを暴行しようとしたため、彼はローマ兵士に逮捕されてしまいます(21:33)。パウロの反対者たちは、パウロが律法を軽視していることに怒っていたのです。

そこで、パウロは群衆に語りかけて弁明を試みます。使徒22章の記述を追ってみましょう。イエス・キリストの啓示も奇跡的に目が開かれた話も黙って聞いていた群衆は、21節で異邦人という言葉聞いたとたんになり始めます。「こんな男は生かしておくべきではない」と人々は非常に怒り、ローマが彼を死刑にしてくれそうにないとわかると、40人が集まって暗殺を試みたのです。そんなことをすれば、明らかにローマに対する反逆になるのですが、彼らは断食をして、自らの投獄も覚悟していました。パウロは辛くも救われますが、その後で何年も投獄されることになってしまったのです。

彼が投獄されたのは、イエスがメシアであるとユダヤ人に告げたからではありませんし、イエスが神の子だと主張したからでもありません。まさに福音を「異邦人に伝えようとした」からなのです。「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっている」という意味がおわかりいただけましたでしょうか。

b. 啓示によって奥義を知った

なぜパウロは、ユダヤ人に反対されると知りつつ、異邦人に福音を伝えようとしたのでしょうか。パウロはユダヤ人の中でも非常に教養が高く、律法にも精通していました。異邦人に福音を伝えれば、ユダヤ人が怒ることは十分に知っていました。そればかりか、3回にわたる宣教旅行で、その反対を、身をもって体験してきたのです。

そのパウロが、彼の働きの総決算として、異邦人の中から救われた初穂を、エルサレムに連れて来ることは至上命令でした。彼は、異邦人教会がアジア各地に生まれて、そのままエル

サレム教会から「独立」することには我慢できなかったのです。どうしても、異邦人とユダヤ人の信徒を一つにしたかったのでしょう。それを宣言する場所は、エルサレムしかありませんでした。諸国からあがなわれた人々が、エルサレムに登ることは、イザヤをはじめ多くの預言者たちが預言していることだったからです。

彼はもともと、異邦人に福音を伝えるためなら、たとえ投獄されてもいいと考えていたのでしょうか。そうではありません。彼はユダヤ人に福音を伝えるためなら「キリストから離されてもいとわない」（ローマ 9:3）と言ってはいますが、もともと異邦人に福音を伝える気は、それほどありませんでした。しかし、彼が啓示によって受けた召しは、さきほど学んだ使徒行伝 22：21 に明記されたように、異邦人だったのです。

人間の会社でもありがちなことですが、私たちの雇い主である神は時に、私たちが願っていない部門に私たちを配属されるのです。でも、パウロが与えられていた賜物、ギリシャ語の会話力と高い教養、そして彼が生まれながらにして持っていたローマの市民権は、神が異邦人伝道のために必要だと考えてパウロに与えた賜物でした。

c.今の時代と前の時代

さて、パウロに反対したユダヤ人たちは、なぜそんなに怒ったのでしょうか。それは彼らが頑迷だったからなのでしょう。もちろん、彼らは頑迷でしたが、それも無理からぬところでした。なぜなら、異邦人に福音が伝えられるというのは、彼らにとっては想定外のことだったからです。それは「前の時代には・・・知らされていなかったのである」（3：5）と書かれたとおりです。

1章のところでもご説明しましたが、奥義が段階的に啓示される、というのは重要です。どんなことでも、最初に発見する人は大変な苦勞をしますが、一度わかってしまえば後の人は簡単です。喜望峰に到達したバーソロミュー＝ディアスは、そこがアフリカ大陸南端だと思いましたが、実はそうではありませんでした。今、地図を見れば、何が起こったのか、私たちには簡単にわかります。それと同様、後の時代の人ほど、多くの事柄を知ることになります。聖書における「奥義」は、いつか「奥義」でなくなるのです。

真理には、天地創造以来、ずっと明らかな（ローマ 1：20）もの（一般啓示と言う）もあります。しかし、ある時に明かされる（特別啓示と言う）啓示もあります。後者は、時によって変更されます。ユダヤ人だけが契約の対象となる、というのはモーセと当時のユダヤ人に与えられた啓示によるメッセージでした。

異邦人に福音を伝える、という啓示を最初に受けたのは、ペテロでした。その様子が使徒行伝 10章に記録されています。彼はまず様々な動物を食べよ、と命じる啓示を受けたあと、コルネリオの派遣した使者たちの訪問を受けました。こうして時代が変わったのです。神はご自分でモーセに与えた啓示を変更されたのですが、その変更の時には、丁寧にペテロだけ

でなくコルネリオにも啓示を与えて、さらに目に見える形で聖霊を下し、誰もが間違いなくそれを理解できるようにされました。

なお、啓示が時に変更されるのは重要なことですが、それがあくまで旧約聖書の預言の「延長線上」にあることにも注意が必要です。彼らが受けた啓示は全くの「青天の霹靂」ではなく、すでに旧約の預言者たちにも、ぼんやりと示されていました。だからパウロは「前の時代には・・・そのように知らされてはいなかった」（3：5）と言っているのです。

d. 「異邦人がユダヤ人と共に約束にあずかる」ことの驚き

では、パウロが受けた「奥義」とは何なのでしょう。それは次の6節に「それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあつて、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」と書かれています。

これがなぜ「奥義」だったのか、アブラハム契約にさかのぼって考えて見ましょう。アブラハム契約は以下のようなものでした。（創世記12章）

12:2 わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される。

あくまで約束にあずかるのはアブラハムであり、彼が祝福を受ければ、その「おこぼれ」で世界中の人々に祝福が及ぶ、という仕組みだったのです。そしてモーセ契約では、イスラエルの民は「祭司の国」（出エジプト19:6）とされました。祭司は人々に祝福を与える役目なので、これも基本は変わっていません。特にモーセ契約は、イスラエルの民が他の民と混じりあわないようにする目的があったのです。

だから、福音はまずユダヤ人に伝えられ、ユダヤ民族がしっかりそれを受け取った後で、それが諸国民に伝えられるのだと、誰もが思っていました。ところが何と、ユダヤ人が福音をしっかり受け取らない先に、神は早くも異邦人を祭司として（1ペテロ2:9）召され、聖霊を注がれたのでした。これはもう、「奥義」としか言いようがない、人の理解を超えたことだったのです。

e. 聖書は「求人案内」である

では、パウロは何のためにその「奥義」を知らされ「福音の僕」とされたのでしょうか。それをパウロは7～9節で解き明かしています。

3:7 わたしは、神の力がわたしに働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである。

3:8 すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、

3:9 更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。

パウロは9節で興味深いことを言っています。彼が伝えているのは「世々隠されていた奥義」ではなく、それにあずかる「務」なのだということです。この「務」は原語でコイノニアであり、「交わり」の意味です。「奥義」は理解すればよい静的なものではありません。実際にそれに加わらないと意味が無いのです。だから、その交わりに加わるとどうなるのかを、パウロは明らかに示しました。その後の10～13節を見ると、教会の持つ宇宙的なミッションが言及されていますが、それはとてつもなく大きな、想像を絶するものなのです。

パウロは「あなたがたのためにわたしが受けている患難を見て、落胆しないでいてもらいたい。わたしの患難は、あなたがたの光栄なのである」(13)と言います。パウロは、異邦人である私たちに福音を伝えるために、大変な苦難に耐えました。神は私たち異邦人を買収するために、キリストの血だけでなく、ユダヤ人である碩学パウロの血までも、その代価に支払われたのです。それは「キリストの苦しみのなお足りないところを、わたしの肉体をもって補っている」(コロサイ1:24)とパウロが述べているとおりです。

3章の最後の部分は、私たちの「内なる人」が強められ、愛による生活ができるようにとの、パウロの祈りがつづられています。この祈りが私たちの一人一人に成就しますように。

2018.8.19 メッセージ エペソ人への手紙 4章

パウロは4章の初めでも自分が「囚人」だと繰り返しています。この言葉には、自分が設立して育てたが、もう訪れることができない教会に向けて手紙を書く、やむにやまれない思いを感じることができます。パウロが設立した教会は、ほどなく様々な苦難に遭うのですが、それを自分の助けなしに、うまく乗り越えて成長して欲しいというパウロの切なる祈りが、この言葉には込められているのです。

a.一つであること

4章に入ってまず、パウロは2～3節で謙虚、柔和、寛容、愛、忍びあい、平和のきずな、聖霊による一致という7つの言葉を並べ、一致を保つように呼びかけています。そのつぎには「一つ」が7回も繰り返されています。パウロの手紙は思いつきで口述しているように見えますが、こうして7つずつ要素を並べるパターンを見ると、けっこう計算されていることがわかります。確かに私たちは同じ御霊を与えられ、同じ信仰を持ち、同じようにバプテスマを受け、同じ神を信じているのです。

ところが、次の7節は「しかし」という逆接の接続詞から始まります。ここには、キリストが賜物の「はかり」によって、一人一人違う賜物（恵み）が与えられていることが示されます。これはIコリント12章に詳しくパウロが論じているとおりです。ここで繰り返された「一つ」は、本書2：14でも説明したとおり、複合的一体性を意味します。

人間がみんな同じであれば、わざわざ寛容を持つ必要はありませんが、そうではありません。人間の能力は多様で、ある人々には全く歯が立たない問題を、別の人々は一瞬にして解決してしまいます。しかし、一瞬にして問題を解決できる天才は、しばしば根気が無く、地道に努力を続けるのが苦手です。ですから、異なる能力を持つ人々が一つになればより大きな働きができます。聖書の理解もそうなのです。全く異なる意見も寛容に受け入れることは重要です。なぜなら、人間の理解力はとても限られているので、異なる意見を聞くことで物事がより立体的に、より深く見えて来るからです。

b.賜物を人々に分け与えた

そしてパウロは、様々な賜物が人々に与えられる理由を解き明かします。8節の「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」は、詩篇68.18の引用ですが、それは日本語訳では「人々から贈り物を受けて高い山に登られた」となっています。これはなかなか訳が難しいようで、七十人訳では「人のために贈り物を受けて高い山に登られた」と訳されています。しかし、いずれにしても重要なポイントは「とりこ」です。私たちはキリストの「とりこ」なので、キリストが受け取った賜物は私たちにも分け与えら

れます。つまり、キリストが全地を完成される、その計画に私たちは招かれ、組み込まれているのです。

キリストの最終目的は、私たちを天に上げることではありません。彼はまた、地の低い所にも降りて来られます。みこころが天に成るように、地にも成らなければならないのです。そのために、私たちはこの地上で仕事をしなければなりません。これこそが、キリストが私たちに様々な賜物を分け与える目的なのです。

ですから、賜物はそれを持っている人ではなく、むしろ周囲の人々のためのものです。教会の中で、車を持っている人は、いつも教会員の送迎奉仕をすることになります。外国語の学習も同じで、外国語ができる人は、いつでも通訳をすることになります。そのように「賜物」はたえず神のご計画のため、全体のためなのです。

c.教会の中の様々な役割

そして11～13節には重要な言葉があります。そこには使徒、預言者、伝道者、牧師、教師という5つの役職が記されています。この五役者（ごえきしゃ）すべて、特に使徒と預言者を復興すべきだとする運動（新使徒運動）が、現在、力を増していて議論を呼んでいます。でも、この運動の是非に関する議論はさておき、教会の様々な役職について基本的な考え方を学んでみましょう。

教会の職名・役割名はⅡコリント12章やⅠテモテ3章などにも登場し、前述の五役者のほか執事、監督、長老、力あるわざを行う者、癒しの賜物を持つ者、補助者などなど、様々なものがあります。また、新約聖書にはその役割は明記されてはいませんが、賛美リーダーや、礼拝の司会者、一般にアッシャーと言われる新来会者を案内する役割も重要です。

しかし、これらの役割に共通する原則は、11節に書かれたように「キリストがそれらの人々を立てる」という点です。いずれも人が任命するのではないのです。これは、実務的に言うと、誰が必要な賜物を持っているかを人が見極めて、その人に依頼、任命する形になります。資格試験に合格したら自動的に任命されるのではなく、どこの教会でもかなり慎重にその人の賜物を見極めています。人間のやることなので間違いは起こりますが、それでも私たちは、選ぶ側も選ばれる側も、それがキリストから委託された聖なる勤めであることを認識しておく必要があります。

そして12節から13節には、役職者たちのすべき任務が示されています。それは「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」というのです。

第一に、聖徒（教会員）を整えて奉仕の業をさせる、ということですが、これはディアコニア（具体的な奉仕活動の意味）の業です。マルタがやっていたこと（ルカ10:40）も「ディアコニア」という言葉で表現されています。ここは、奉仕もせずに座って話を聞いていたマ

リヤが称賛され、奉仕活動をしていた人が非難されるように読めてしまいますが、誰もディアコニアをしなければ活動は成立しません。問題はマルタが「心を騒がせていた」ことです。教会でも奉仕をめぐる同じ問題が起きがちなので、役職者たちは「聖徒たちをととのえて」誰も「心を騒がせ」ずにディアコニアができるようにしなければなりません。

この「奉仕：ディアコニア」には、つまり教会が社会に向かって行う全ての活動（ミッション）が含まれます。教会員が満足するだけでなく、協力して外に向かってキリストの業をする必要があります。そして次はキリストのからだを建てる、つまり教会をしっかりと成長させなければなりません。さらにその上で、信仰、知識、徳の3つの面について完成を目指さなければならぬのです。とても人間業ではできないことですが、役職者は、「かしら」であるキリストにしっかりとつながって、この目標にチャレンジする必要があります。

d. 様々な教えの風

パウロは続いて、14～15節において「悪巧みによって起る様々な教の風」について警告を与えています。彼はすでに、使徒20章でこう警告しています。

20:29 わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んで来て、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。

20:30 また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。

この警告は現実のものとなりました。黙示録2章には、エペソの教会へのメッセージがありますが、そこかた、彼らが実際に偽使徒の攻撃を撃退したことがわかります。

「教えの風」が外部からだけ来るのであれば、他の教会と絶縁していれば安全ですが、パウロが警告したように、内部からも誤った教えが発生します。

教えの真偽は、簡単には見極めることができません。自分の考えと違う教えを拒否するのは危険で、自分の方が間違っているかもしれないのです。また、全てのことに真偽があるわけではなく、パウロが食物に関してローマ14で述べているように「どちらでもよい」という事柄も多く、それをめぐって教会が分裂して争うのは愚かなことです。そこで、偽の教えを見分けるのは簡単ではありません。唯一の対策は、教会員の一人一人が信仰、知識、徳の3つの面で成長することなのです。

そうすれば「もはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがない」（4：14）という状態になれます。

偽の教えを排除することばかり考えていると、本章の最初から繰り返し強調されている「一致」に逆行する結果を招きます。自分と違うものをすべて否定すると、結局は誰とも一緒にやっていきません。プロテスタントは、そうして完全にバラバラになってしまいました。違

う見解をどう許容して行くのか、というのはとても重要な問題です。そのためには信仰、知識と共に「徳」も重要です。こちらが一緒にやっけて行こうと思っても、向こうが一緒にやりたくないと言うなら、一致は不可能です。向こうが「考え方は違うが一緒にやっけて行こう」と考えるかどうかは、こちらの「徳」にかかっているからです。

e.新しい人を着る

16-21 節でクリスチャンの霊的成長について述べたパウロは、22～24 節で「情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」と宣言します。

信仰を告白して洗礼を受け、救いを受け取ることは、一時的な決断です。エペソ書の読者は全てそのプロセスを通して来た人々です。ところがパウロは、それだけでは不十分であると指摘し、クリスチャンがその後に歩むべき道を示します。すでに「古き人」は十字架にかけられて死んでいる「はず」なのですが、まだ実際には生きているので、意識的にそれを脱がなければなりません。しかし、心の深みまで新たに「されて」という部分は受動態で書かれています。ところが、新しい人は「着る」と再び能動態です。聖霊は私たちを助けて、成長させて下さるのです。このようなプロセスをキリスト教用語では「聖化」と言いますが、それは長いプロセスです。

パウロはここで「怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤ったままで、日が暮れるようであってはならない」(4:26) と、と理解ある指示をしています。でも、イエスが山上の垂訓(マタイ 5:21-22) で求めているのは、全く怒らないことです。その次の、盗んで生活するのではなく、正当に働け(4:28) も、山上の垂訓のレベルに比べれば、やや低次元でしょう。そこで「どこまでやれば及第か」という疑問が出てきます。たぶん、誰も完全に達することはできず、それに向かって努力するだけでしょう。

しかし、完全にできない人々でも「あがないの日のために、聖霊の証印を受けた」(4:30) とパウロは宣言します。これは過去形です。出来ても、出来なくても、「あがないの日」つまり裁きの日には受けた聖霊の証印によってパスさせてもらえるのです。

でも「神の聖霊を悲しませてはいけない」とパウロは言います。聖霊は、私たちが実際にできていないのにも関わらず、ご自分の責任で「合格」の証印を押して下さったのですから、実態があまりにもひどいと、悲しまれるのです。だから、私たちは「古き人」を脱ぎ捨てて「新しき人」を着るべきなのです。

2018.8.26 メッセージ エペソ人への手紙 5章

4章では教会の中の一致、また職名や役割についての議論がなされていましたが、5章に入るとパウロは個人レベルでの生活実践について語り始めます。「神に愛されている子供」だから「神にならう者になりなさい」とパウロは語ります。キリストの愛によって私たちは救われたのですから、クリスチャンは彼の期待に応える必要があるのです。

a. 汚れを避けること

次にパウロは、不品行、いろいろな汚れ、貪欲、卑しい言葉、愚かな話、みだらな冗談などを避けるように訓戒しています。不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことはできない、という言葉は、洗礼を受けて救われたものであっても、きちんと歩まない限り、神の国を受け継ぐことができないという、重大な警告です。

これは、偶像礼拝の罪に対する警告なのですが、クリスチャンがそれに陥らないという保証はありません。光の子らしく歩み、善意、正義の実を結べという訓戒は、私たちが心すべき言葉です。私は関西人なので、時々、話を面白くするために冗談を言いますが、あまりに下品な冗談にならないように注意しています。

b. 「やみのわざ」を指摘すること

今日、特に重点的に議論したい第一のポイントは、11・12節です。「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である」というくだりです。これは、キリスト教の中での関係についてなのか、他宗教や世俗の人々との関係についてなのか、あるいは両方を含む教えとしても解釈できるでしょう。

イエスはマタイによる福音書7章で人を裁かないようにと教えました。また、本書4章でもパウロはクリスチャンの一致を何度も繰り返し述べています。そこで「やみのわざ」を指摘することと、「裁いてはならない」という教えをどう調和させればいいのでしょうか。これは実際の場面ではとても難しい問題です。

一見、元気があって人が集まっても、間違った教えや極端な教えを説く教会、不道徳を容認している教会、財務が不透明な教会、一部の信徒が「傷つけられた」と指導者を非難している教会があります。奇跡的なことが起こったと主張していても、それが誇張や演出だったという話もあります。その一方で、教えも問題が無く、教会の運用も適切なのに、受洗者がなくて滅亡に向かっているという教会もあります。

実際、全く何の問題もない教会など、存在しないと言ってもよいでしょう。現実の教会は、

「やみのわざ」とまでは言えないものの「薄暗いわざ」がある一方で、光の子としてのわざもやっている、というのが実情です。

そこで、「薄暗いわざ」を全て指摘して、そういう教会と一切関係を持たないようにするならば、どの教会とも一緒にやっていけません。また、そうして孤立するのは、かえって危険です。孤立すると独善的になり、様々な問題が起こるからです。逆に、多くの教会と交流している方が、現実的に言って危険性は少ないのです。

でも、単に仲良くすることだけを目的にして、どんな問題点があっても黙っているというのも、あまり良いこととは言えません。やはり、11節の教えのように「実を結ばないやみのわざ」から縁を切って、それを指摘すべき時もあります。

c.眠っている者よ、起きなさい

そこで、どこにその「一線」があるのか、というのが問題です。たぶんそれは、終末論や聖霊論、三位一体論の細かい解釈などという神学問題では無いと思われまます。なぜなら、新約聖書の中で問題にされているのは「神学」ではなく「わざ」だからです。不品行（性的不道徳）、詐欺、横領、弱者への虐待などは、容認できない性質の問題でしょう。しかし、現実には複雑で、これは一筋縄で解ける問題ではありません。ヘブル書5：14にある「善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された成人」になる必要があるでしょう。

成人になるとは、眠っている状態から「起きる」ことでもあります。14節には「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」と書かれています。

これは、未信者に対して覚醒を促すものというより、洗礼を受けたクリスチャンに、より深い覚醒を促すものであると考えます。結局、物事がはっきりわからないのは、まだ「眠っている」からであって、立ち上がってキリストの光を受ける必要があるのです。

d.悪い時代を「生かして用いる」には？

16節の「今の時を生かして用いなさい」は、とても有益な言葉です。パウロの時代にすでに「悪い時代」だったのです。当時の人々は純真で、素晴らしい聖霊の働きがあったので、「良い時代」だったように思ってしまうのですが、それでもパウロは「今は悪い時代」だと言いました。今、パウロが出てきたら「今は極悪の時代」と言うかもしれません。

でも、パウロはその悪い時代を「生かして用いなさい」と言うのです。株を売買している人々は、株価が上がっても下がっても儲けるやり方を知っています。それと同じように「賢い者」のように歩く必要があるのです。悪い時代、暗い時代になればなるほど、光が明るく見えません。それと同様に、悪い時代は人々に福音を伝えるチャンスなのです。

17節でパウロは「主の御旨がなんであるかを悟りなさい」と教えています。悪い時代に、

良い時代と同じことをやっても、何もできません。逆に、悪い時代に合わせた動きをする必要があります。それが「賢い者」なのです。

e.教会はキリストの妻

5章のハイライトは、キリストと教会が夫と妻の関係にある、ということです。この下りは、夫と妻に対する訓戒でもあるのですが、今日はキリストと教会の关系到スポットライトを当てて考えてみましょう。夫と妻は、互いに支え合うべき関係です。キリストは教会のために命を捨てられたのですが、妻たる教会はまた、夫であるキリストに仕える必要があります。これを読むと「救いは完全な恵みであって、私たちには何も義務はない」という考え方が誤りであることがわかります。

26・27節では、キリストが「水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである」と書かれています。

イスラエルでは、結婚（ニスーイン）の前に婚約（キドゥーシン）があります。花嫁に選ばれた女性は、それから花婿のために身を整え、1年ほどかけて美しくなるのです。そこで、キリストは私たちを水で清め、聖霊によって清いものとされたのですが、実際の教会はといえば、「しみも、しわも、そのたぐいのもの」がいっぱいあって、とても汚い状態で、花婿を迎える準備は全くできていません。この状態で、厚かましくも「主よ来て下さい」と私たちは言えるのでしょうか。少しは、結婚式の備えをすべきではないかと思えます。

f.最後の奥義

さて、32節でパウロは「この奥義は大きい。それは、キリストと教会とをさしている」と言いました。何でこれが「大きい奥義」なのでしょう。

実は、旧約聖書時代から、イスラエルは神の妻の関係にあるとされてきました。エレミヤ2章の冒頭には、神がイスラエルを「花嫁」と呼んでいますし、ホセア書では「不貞の妻」という位置づけです。もちろん、雅歌もまた神とイスラエル、あるいはメシアとイスラエルの関係を示しているとされます。ちなみに、旧約聖書においてはメシアと神はほとんど同義語であり、イスラエルはメシアの花嫁でもあるのです。つまり、日本人である私たちが、メシアの花嫁になる道は閉ざされていたのです。

ところが、ここでメシアの花嫁が「教会」とあるという話が登場します。奥義とは、今まで示されていなかったことが、世界に知られることです。今まで、花嫁の友人くらいにしかなれなかった異邦人が、何とメシアの花嫁になれるというのは、大ニュース、良い知らせです。しかも、現代の世界で言えば、たった2千万人しかいないユダヤ人にしかメシアの花嫁

枠が無かったのに、なんと、今や80億人にメシアの枠が広げられたのです。これは「大きい」と言うべきではないでしょうか。

最後に、結婚式のお話をして終わりたいと思います。

私たちクリスチャンはキリストと「婚約」したのですが、聖書の最後の場面は、その結婚式なのです。黙示録21：9にはこう書かれています。「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう」。この小羊は、もちろんキリストご自身です。そして、新しいエルサレムが天から下ってきます。その後を読んでいくと、十二の門にはイスラエルの十二部族の名が記されており、土台には十二使徒の名前が記されています。十二部族の名が記されている、ということは、この町はイスラエル全家を象徴しているのですが、同時に教会の土台は使徒（エペソ2：20）であることから、この新しいエルサレムは教会をも象徴していることがわかります。小羊には、イスラエルと教会、という2人の妻がいるわけではなく、イスラエルと教会が一体となったものが、花嫁なのです。これは、エペソ2：15に書かれた「ひとりの新しい人」の実現です。

イスラエルだけでも、教会だけでも、キリストの花嫁は完全ではありません。この2つが一つになった時、はじめて花嫁は「きたりませ」（黙示録22：17）と叫べるのです。

2018.9.9 メッセージ エペソ人への手紙 6章

教会の目的から始めて、夫婦のあり方、キリストと教会のあり方について書いたパウロは、さらに親子、主人と僕の関係について話を進めます。信仰実践という、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。聖書の学びでしょうか、奉仕でしょうか。これらのことも重要でありますが、パウロが本書で強調しているのは人間関係の問題なのです。

a. 親子関係と主従関係

親子関係について「父母を敬え」は、十戒の中で唯一「幸福になり、地上でながく生きながらえる」という「ごほうび」が約束されている、特異な条項です。でも、パウロはここで「父たる者よ。子供をおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」という、父（母）に対する訓戒も付け加えています。人間関係が何か問題がある場合は、たいてい双方に責任がありますので、パウロは父母を敬うように子供に命令するだけでなく、親にも責任があると指摘するのです。子供を単に怒らせないだけでなく、「主の薫陶と訓戒」で育てるのは大変なことですが、そうしておけば子供は自然に父母を敬うでしょう。

そして次に、パウロは主従関係に言及します。ここの原意は「奴隷」ですが、ここに書かれた原則は、現在の雇用主と従業員の関係でも同じです。主人に心から仕えることを「良いこと」とするここの論調は、「資本家に都合よすぎ」という批判もあるでしょうが、実際に「いやいや」で最低限の働き方をしても楽しくありません。そして、最後に9節で述べられているように、この世界で使う側と使われる側に立っていたとしても、同じ天の父の子であって御国においては同等なのです。パウロはピレモンへの手紙で、この実践を求めました。ピレモンという主人のもとから逃亡したオネシモを、再び兄弟として受け入れるようにと求めています。短い手紙なので、ぜひ読んでみて下さい。

b. 戦う相手は誰なのか

パウロはこの手紙の最後を、霊的な戦いの記述で締めくくっています。これは最近とてもホットな話題で、いろいろな解釈が成り立つ箇所なので、詳しく学んでみたいと思います。まず、考えなければならないのが「敵」です。実際の戦争では“friendly fire”つまり「同士討ち」という事故が多く発生します。敵味方の判別は簡単そうですが、実はそう簡単ではありません。特に悪魔は光の天使（Ⅱコリント 11:14）に偽装することで知られていますし、さらに、主の弟子たちを分断して、互いに戦わせるのが悪魔の戦略なのです。

「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者」という言葉を読むと、何となく圧政を行

う支配者を指すように思えます。しかし、自民党や安倍政権と戦うことが「霊の戦い」だと考えるのは早計です。なぜなら、ローマ書13章冒頭、1テモテ2章には、クリスチャンはこの世の支配者には従うべきであり、彼らのために祈るべきだという原則もまた示されているからです。ただ一つの例外は、支配者から偶像礼拝を強制された場合です。旧約聖書には、支配者が強要した偶像礼拝を信仰者が拒否した話が何度も出てきますし、新約聖書にも、宣教を禁止する支配者に使徒たちが逆らったことが記録されています。しかし、それ以外の場合であれば、原則としてクリスチャンはこの世の支配者に従うべきなのです。

それでは、「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者」は誰を指すのでしょうか。それは反キリストの霊であり、福音宣教を妨害する働きです。それは、ある時は科学万能主義であったり、人道主義であったり、特定の宗教であったりします。しかし、同じクリスチャンの中での意見の違いにもとづき、互いに「悪魔の手先」などと攻撃を始めると危険です。こうして主の体である教会を分断することこそが、最大のサタンの戦略なのです。

ですから「血肉に対するものではなく…」という言葉に注意しなければなりません。特定の人間ではなく、霊、あるいは思想が問題なのです。これはテロのようなものです。一度、間違った思想が人間に注入されると、その人間は生きた凶器と化します。その人間を殺しても、思想が生きている限り、暴力が際限なく続くのです。私たちの戦いは、イデオロギーのためなら人殺しをしてもよい、と教える闇の霊と戦うことなのです。

そういうやみの世界を支配する様々な悪霊はみな、天上にいる悪の霊の支配下にあり、その親玉が悪魔なのです。これは大変な戦いです。

c. 神の武具で身を固める

しかし、この戦いには「必勝法」があります。それは、主イエスの偉大な力で強くなり、神の武具で身を固めることなのです。ここで言う「武具」は、武具の一式という集合名詞です。武具は、様々な装具から構成されていますが、それら一式をすべて身に着ける必要があります。1箇所でも武器でおおわれていない部分があると、そこを攻撃されてしまいます。そして、この戦いを「引き分け」にせず、敵を倒してから、なおもしっかり立つように(13)と、聖書は教えているのです。

神の武具というイメージは聖書の中で何度も登場しています。

イザヤ 59:17 主は義を胸当としてまとい、救のかぶとをその頭にいただき、報復の衣をまとって着物とし、熱心を外套として身を包まれた。

ローマ 13:12 夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。

Ⅱコリント 10:4 わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞を

も破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、5 神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし…

I テサロニケ 5:8 しかし、わたしたちは昼の者なのだから、信仰と愛との胸当てを身につけ、救の望みのかぶとをかぶって、慎んでいよう。

というわけで、パウロは「武具」に類する言葉を多用しているのですが、エペソ書の6種の武具と比較すると、あえて6つに特定する必要は無いようです。たとえば、エペソ書では「正義の胸当て」となっていますがI テサロニケ 5:8 では「信仰と愛との胸当て」とされています。神の武具一式は、数はいくつか特定できませんが、1つだけ持てば十分なのではなく、いくつかの要素を持つ必要があるようです。

武器は興味深い性質があります。それは、外から着るものであり、キリストの「義」と似た性質があります。私たちが不義から守られるのは、内面が清められると同時に、ちょうど鎧のようにキリストによって外的に守られるという意味があるのです。

d. 6種類の神の武具

1. 真理の帯

鎧装束における帯は、武器をぶら下げる鞆を取り付けるものです。聖書の真理に立つことが、クリスチャンの立ち位置であり、あらゆる反対論を見極める基本です。また、帯を締めることはキリストに奉仕するという態度の表れでもあります。

2. 正義の胸当て

次に胸当ては体の重要な器官、特に「心」を守るためのものです。悪魔は「お前は罪人だ」と言って主の弟子を攻撃しますが、胸当てはそれを守ります。

3. 平和の福音の備え

福音と足は関係しています。「ああ美しいかな、よきおとずれを（福音）を告げる者の足は」（イザヤ52:7）という言葉の通りです。また、福音を拒否された時に「足のちりを払い落とす」（マタイ10:14、使徒13:51）という表現もあります。イエスが弟子の足を洗ったことにも注意しましょう。足は地面に着いている部分で、歩いているうちに汚れますし、鋭いもので足が傷つくと歩けなくなります。宣教はきれいごとでは済まず、様々な汚れがつくので、「互いに足を洗いあう」必要があります。それが「平和の福音の備え」ではないかと思われれます。

4. 信仰の盾

盾は火矢を防ぐものだと、目的が明言されています。火矢は詩篇7:13などにも登場する武器です。最初は被害が無いように見えて、そのうちに大きな被害をもたらします。これは悪意ある攻撃で、讒言、様々な畏、暴力、妨害行為、民事暴力などを指すと思われれます。これらは「必ず勝てる」という確信によって消せるのです。

神は「アブラハムの盾」(創世記 15:1)になると宣言されました。これは、神があらゆる攻撃からアブラハムを守るという宣言です。「信仰の盾」は、アブラハム契約が私たちにも適用されるという確信だとも言えます。

5. 救のかぶと

頭部への傷は致命傷なので、それを守るのがかぶとです。「救い」は命の約束であり、死から私たちを守ります。しかし、「救いのかぶと」には別の意味もあります。ローマ軍の兵士も、かぶとや胸当てに、遠くからでもわかる印をつけていました。

イザヤ 59:17 には「主は義を胸当てとしてまとい、救のかぶとをその頭にいただき、報復の衣をまとして…」という言葉があります。メシアの身に着ける義の胸当てや、救いのかぶとは、自分を守るというよりも、むしろメシアを待ち望む選民に「義」と「救い」の到来を知らせる意味が大きいでしょう。

もし皆さんが、災害で山の中に孤立していたら、そこに日の丸をつけた自衛隊が来たなら、その旗印を見た瞬間に「助かった」と思うでしょう。それと同様、私たちはキリストの旗印をよく見える所に掲げ、人々に見せる必要があります。

6. 御霊の剣

最後は御霊の剣です。これは神の言葉(ヘブル 4:12)の象徴です。武具一式の中で、唯一、攻撃に仕えるのが剣です。私たちは、妨害者を攻撃するために、ついつい人間の理屈、人間の武器を用いがちですが、そうすると後で自縄自縛になることがあります。敵を攻撃する場合は、必ず神の言葉を使わないといけません。

e. 互いに祈り合う

パウロはこの書を祈りで締めくくっています。祈りは様々な目的がありますが、ここでは特に「すべての聖徒のため」の祈りが強調されています。それは特に、パウロのためなのです。パウロはとても強い人間でしたが、彼もまた大胆に福音の奥義を語るために祈りが必要だと言っているのです。パウロでさえも祈りを必要としていたなら、私たちはなおさらです。私たちは互いに祈り合う必要があります。

獄中で手紙を書き終えたパウロは、兄弟テキコを手紙と共に派遣しています。手紙と共に人を派遣するのは、その手紙が真実であること保証するためでした。エルサレム会議の後(使徒 15:22-30)、使徒たちは書面と証人を一緒に送りました。神は人に「契約書」である聖書を渡すだけでなく、イスラエルの民や、教会という証人を選ばれました。文書と人を同時に派遣するのは、神のやり方なのです。私たちもまた、テキコと同じように、聖書の言葉を解き明かして行きたいと思えます。